

Title	京大広報 No. 196
Author(s)	
Citation	京大広報 (1980), 196: 1123-1128
Issue Date	1980-05-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/209490">http://hdl.handle.net/2433/209490</a>
Right	ファイル中には未許諾による非表示部あり.
Type	Others
Textversion	publisher

# 京大広報

No. 196

京都大学広報委員会



本年度学部入学式（4月11日・総合体育館） —関連記事本文4ページ—

## 目 次

学部入学式における総長のことば

総長 沢田 敏男…… 2

昭和55年度学部入学式…………… 4

昭和55年度大学院入学式…………… 4

医療技術短期大学部の入学式…………… 4

部局長の交替…………… 4

＜随 想＞

附属図書館の思い出……名誉教授 堀江 保蔵…… 5

＜紹 介＞

防災研究所・鳥取微小地震観測所、北陸微小地震  
観測所…………… 6

## 学部入学式における総長のことば

総 長 沢 田 敏 男



本日ここに昭和55年度入学式を挙行し、2,510名の澁淵とした優れた諸君を本学に迎えますことは、京都大学のみでなく国家社会にとっても大きい喜びであります。諸君の入学を祝い、その前途を祝福するためご臨席いただきました本学名誉教授の諸先生、各部局長並びに教職員の皆様に対しまして、入学生の諸君と共に心から感謝し厚く御礼申し上げます。

入学生の諸君、おめでとうございます。諸君はこれまで、小学校、中学校、高等学校と学齢を重ね学業を積み、大学入試という難関を突破して、めでたくこの京都大学に入学されたのであって、今や喜びと共に新しい希望に燃えておられることと思います。爛漫の春はまさに諸君のためにあるような気持がしていることでありましょう。そのような諸君を見て、ご父兄の皆様は、どれ程の喜びをかみしめておられるかと推量し、心よりお慶び申し上げます。

さて諸君、諸君自らが志向して、入学された京都大学とは、如何なる大学でありましょうか。入学の初頭に当って、京都大学の歴史や伝統・学風について知ることは、そこに学ぶ者の心構えや自覚を醸成するうえで大変重要であり、また意義深いことであります。

京都大学は明治30年（1897年）6月18日に開学されたのでありますが、その創立については、明治25年、当時の国会に建議されたことに始まります。

その建議の主旨は、わが国固有の文化の集積する西京の地京都に大学を設置することにより、当時既設の東京大学に対する競学の学風を起し、互いに切磋琢磨し、清新なる学術の発達を促そうとすることにあります。この主旨が本学建学の精神にも連なつたと考えられ、その後の教官や関係者にアカデミックな学問・研究に対する強い使命感を意識させ、後年、世にいう“京都学派”に象徴されるような学風を起す一つの契機にもなつたと考えられています。

また、真理の探求を使命とする大学においては、当然学問・研究の自由が必要です。そして、学問・研究の自由のためには大学の自治が尊重されなければなりません。この学問・研究の自由と大学の自治を確立するために、京都大学は大きな努力を続けてまいりました。その事例をあげるならば、大正2年から3年（1913年～1914年）にかけて起つた、いわゆる沢柳事件は、わが国における大学教官の任免に関する教授会自治確立の発端となりましたし、さらに、昭和8年（1933年）に起つた京大事件（いわゆる滝川事件）は、思索の自由と教授の自由を含む学問・研究の自由を確立し、このために必要な大学の自治を確保するためのたたかいでありました。このように、京都大学の教官や関係者は、学問・研究の自由と大学の自治確立のために献身的努力をつづけ、わが国の大学の健全な管理運営制度の創造と発展に大きく貢献すると共に、進取的・独創的研究の多くの優れた業績によって、真に人類の幸福に貢献する学問の府として輝かしい歴史と伝統を形成してまいりました。そして、本年創立83年を迎えますが、この間、十万四千名にのぼる卒業生と一万六千四百名の修士を世に送り出し、一万五千九百名に達する博士が生まれており、わが国の学術と文化の向上発展に大きく寄与してまいりました。

自然科学分野の秀峰とみられるノーベル物理学賞を受賞された湯川秀樹博士並びに故朝永振一郎博士は本学の出身でありますし、江崎玲於奈博士も本学教養部の前身第三高等学校で学ばれた方です。また、本学では哲学・歴史学等の人文科学分野においても多くの碩学を輩出し、前述の京都学派と称揚される学問的連峰を形成しています。諸君は、学徒として身近にこのような峰々を仰ぎみつつ学ぶことができるのは幸せなことです。新しいこの希望の門出に当って、しっかりと目標を見つ



めつつ一步一步と前進し、登高されることを望むものであります。

諸君は今後4年間、医学部にあっては6年間の大学生活を送られるわけですが、これからの勉学に当っては、特に次のような点に心掛けてほしいと考えます。

その第一は、自主的に学ぶという姿勢をもってほしいことであります。

大学では自ら学ぶ姿勢が必要であり、常に学問に対し積極的でなければなりません。学問分野が細分化し、深化すると共に、その進歩・発展が目覚ましい今日、高効率的に学ぶことが要求されますが、この場合においても、その研究成果を得るまでに先人先達が苦心を重ねた過程や、工夫された手法を学ぶことが大切なことであります。そして同時に、自分自身が、その研究環境のなかの人となって批判的に考えることが必要であります。

また、自主的に学ぶ内容は、勿論自ら決定し方向づけなければなりません。その場合、科学技術に関する学問ばかりでなく、心の学問すなわち精神文化についても、併せて修学するよう心掛けてほしいと思います。人類の限りない存続・発展のためには、少なくとも科学技術と精神文化とのバランスのとれた進歩・発展が重要ではなからうかと考えます。このことは70年程前に英国のバートランド・ラッセル卿が、当時国際的に高い文化を誇っていた英国人に対し、精神文化の貧弱さを指摘し、不均衡な文化をもつ国の将来について警告した例に照してもうなずけることであります。

現代社会に生きるわれわれも、科学技術の急速な進歩に目を奪われ、または、その修得におおわらわであるため、道徳、信仰、芸術等に関する精神文化をおろそかにしてはいないでしょうか。この点について、われわれは、大いに反省すべきであると思います。21世紀を背負って立つ諸君、このことを十分考慮されて修学するよう望みます。

その第二は、体力づくりに努めてほしいことです。

若人の体力づくりは、80年代を迎えて益々重要視されてまいりました。それは、科学技術の発達した現代社会においては、運動不足とか精神の脆弱化などという思わぬ弊害が発生しつつあるからです。また、われわれの一生を楽しく過ごそうとすると、その根源はなんといっても、まず心身の健康にあると思います。そして、その健康状態を維持するのが優れた体力にあることは申すまでもありません。

入学生諸君、諸君はこれまで受験勉強に追われて、体力を鍛えることをおろそかにしてきた方が多いと思いますが、これからは大学における勉強や研究のために、また、近き将来の活動期に備えて、自己の体力の錬成に心掛けるべきであると思います。そしてまた、諸君にとっては今がもっとも体力を鍛えるのに適した時期であり、この大学生時代が残されたチャンスではなからうかと考えます。

大学における体力づくりは、まずスポーツに親しむことでしよう。本学には、創立七十周年記念に卒業生等の方々により寄付されたこの総合体育館をはじめ、各種の体育施設があり、陸上競技、ボート、ヨット、柔道、剣道、馬術、アメリカンフットボール等四十数部に及ぶ男子・女子の運動部やクラブを擁する体育会が組織されていて、カレッジスポーツの目的達成のために目覚ましい活動をしています。諸君も好きな運動部やクラブに入ってスポーツに親しみ、体力の錬成に努められるよう希望するものであります。

体力づくりに関連して特に申し述べたいのは、身体障害者の方の勉学やリハビリテーションについてであります。このことは全学的に努力し、協力し合ってまいりたいと考えますので、諸君の理解と協力を希望するものであります。

最後に、大学の自治と学生運動について一言触れておきたいと思います。わが国の大学の自治は、前述のように京都大学の歴史と共に培われてきたといっても過言ではありませんが、この大学自治の本質を理解せず、今なお学生運動や自治会活動等の一部に行き過ぎた行為が見られるのは残念なことであります。大学の自治は、人類の福祉に奉仕する学問や研究の自由を守り、真理の探求が完全に行ないうるために認められ確立されてきたのであって、決して治外法権的な意味・性格をもつものではなく、キャンパス内における体制無視や諸法規軽視の行為が容認されるものではありません。大学の自治を破壊するような学生運動や自治会活動等は厳に慎むべきであります。

望ましい学園の姿として、私には次の言葉が思い出されます。

「そこには、強くて愛情豊かな自信ある教師の尊い人間があり、高い夢を抱いて、自らを抑えて精進怠らぬ若人があり、しかもその周囲には、社会の温かい深い信頼感があった。」

これは本学の第16代総長平澤 興先生が旧制高等学校について述べられた言葉であります。私はこの平澤先生の言葉に心からの共感を覚えます。諸君もよく味わってほしいと思います。

以上二、三のことについて申し述べましたが、要は、大学においては、自主的、積極的に学問や課外活動特にスポーツと取り組み、学問と共にスポーツ等を通じて人間形成に努めてほしいと思うものであります。

勉学とスポーツを両立させることは、相当の努力が必要でありましょう。しかし、精進して止まぬ情熱をもち、進んで苦難の壁にぶつかり、これを打ち破る工夫と努力をすること、これこそが若い諸君にとって一番大切なことではないでしょうか。

どうか、入学生諸君、充実した大学生活を送られるよう希望します。

一言所感を述べて式辞といたします。

(本稿は、4月11日の学部入学式における総長のことばを速記をもとにまとめたものである。)

## <大学の動き>

### 昭和55年度学部入学式

4月11日(金)午前10時から、昭和55年度学部入学式が本学総合体育館において挙行された。

入学式は、名誉教授、教職員、新入生の父兄など臨席のもとに学歌斉唱、「総長のことば」と進行し、午前10時40分終了した。

今年度の学部新入生数は次のとおりである。

文学部198名、教育学部50名、法学部330名、経済学部201名、理学部283名、医学部121名、薬学部81名、工学部950名、農学部296名、計2,510名(うち女子学生206名)。そのほか、3年次に33名の編入学生を迎えた。

### 昭和55年度大学院入学式

4月11日(金)午後3時から、昭和55年度大学院入学式が本学総合体育館において挙行された。

入学式は、名誉教授、教職員など臨席のもとに学歌斉唱、「総長のことば」と進行し、午後3時30分終了した。

今年度の大学院新入生数は次のとおりである。

研 究 科	修 士 課 程	博士後期課程
文学研究科	65名	7名
教育学研究科	19	
法学研究科	15	1
経済学研究科	16	1
理学研究科	126	9

医学研究科		69
薬学研究科	27	4
工学研究科	544	7
農学研究科	106	6
計	918	104

(注) 医学研究科にあつては、博士課程である。

### 医療技術短期大学部の入学式

医療技術短期大学部では、4月10日(木)午前10時から、本短期大学部大講義室において来賓・父兄等臨席のもとに昭和55年度入学式を挙行した。

式典は、「学長のことば」に始まり「主事のことば」続いて早石 修医学部長および塚原 勇医学部附属病院長の祝辞が述べられ午前10時25分終了した。

今年度の新入生は、看護学科80名、衛生技術学科41名、専攻科助産学特別専攻20名で計141名である。

(医療技術短期大学部)

### 部 局 長 の 交 替

#### 薬学部長

5月1日、中垣正幸薬学部長の任期満了に伴い、その後任として高木博司薬学部教授(薬理学講座担当)が任命された。任期は、昭和57年4月30日までである。





## 〈 紹 介 〉

## 防災研究所・鳥取微小地震観測所、北陸微小地震観測所

鳥取、北陸の2か所の微小地震観測所は、わが国の「地震予知研究計画」に基づいて、防災研究所附属施設として、それぞれ昭和39年および45年に設立されたものである。

正確に云えば、「地震予知研究計画」の発足したのは昭和40年であるから、鳥取微小地震観測所（鳥取市円護寺公園墓地内）の設立はその1年前ということになる。昭和39年度には、鳥取観測所のほかに、東京大学地震研究所附属和歌山微小地震観測所が同時に設立された。鳥取や和歌山は地震学上興味のある場所であって、戦前から、特に京都大学の研究者によって注目され、地震や地殻変動の観測が盛んに行われてきた地域であった。いわば、地震予知計画誕生のための温床ともいえる場所である。したがって、この地に、地震予知計画に先立ってこの2か所の微小地震観測所が置かれたことは決して偶然ではなく、地震予知研究のパイオニアとしての役割が期待されたのであろう。事実この2観測所は、観測網による微小地震の常時観測という困難な仕事を進め、わが国の微小地震および地震予知研究の先頭に立って来たと云って差支えなからう。特に、鳥取微小地震観測所の昭和40年観測開始以来現在まで15年間にわたる微小地震観測記録は、微小地震に関する均質な観測記録としては、文字通り世界唯一のものであって高い評価を与えられている。鳥取観測所では、微小地震のほかにプロトン磁力計による全磁力観測を10年以上続けており、地震予知を目差した地磁気研究の関西における中心である。

北陸微小地震観測所（福井県鯖江市下新庄町下北山29）は、石川、福井、岐阜、滋賀の諸県にまたがる北陸地域を対象として設立された。北陸地域は、山陰、丹後、若狭湾岸につながって、古来大地震の多く発生して来た場所であるが、それ故に、根尾谷、花折、柳ヶ瀬、鍋木など

の大きな断層が集中する場所でもある。すなわち、北陸地域は地震活動、地殻変動、新しい造構造運動など、いわゆる地殻活動の典型的に現われている場所であるといえることができる。したがって、この観測所は設立当初から、微小地震だけでなく地殻変動の観測や各種の地震計を用いての広帯域広ダイナミックレンジ観測を行なうべく計画された。そのため、鯖江市の観測所庁舎に隣接して、地下坑道観測室が設けられている。

昭和50年度、鳥取微小地震観測所の観測網（鹿野、智頭、三日月、泉、氷上、大屋の7観測室）および北陸微小地震観測所の観測網（福井、小松、勝山、今庄、浅井、美浜の6観測室）は専用電話回線によってテレメーター化され、現在では、観測所において管下の地震活動を刻々把握できるようになった。また、昭和54年～58年の「第4次地震予知5年計画」期間中に、これらの微小地震観測結果はすべて自動処理され、テレメーターによって、東大地震研究所地震予知観測情報センターに集められることになる。

両観測所のような地震予知関係の観測所は、人員的には極めて小規模のもので、ほとんどが助手1名、技官1名（一部の観測所では2名）である。したがって、現地で観測に従事するこれら所員の苦労は並大抵のものではない。大学の地震予知研究の発展は、これらの観測所員達の努力に負うところが大きい。

（防災研究所）



鳥取微小地震観測所・テレメーター観測設備